慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	淡路円次郎著 職業心理学
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.3 (1928. 3) ,p.456(164)- 460(168)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280301-0164

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

淡路圓次郎著　職業心理學

著者は應用心理學一般を專攻し、心理學の實際的應用方面にも自ら從事せられ、性能と仕事との關係を研究の題目として海外遊學を終へて昨年歸朝せられた。著者は本書に於て「適材を適所に配置して職業活動を合理化せんがために、人間力利用の原理並びに方法」を應用心理學の立場から研究し、之れに一の體系を與へんとするものである。

適材適所の要求は既に古くより存したが、最近所謂能率增進の問題と關聯して此の要求の意義が一般に深く認めらるゝに至つた。乍然、從來能率學としての科學的管理法は、著者も認むるが如く往々人間を機械視し、其が「人間能率を目途するとは稱するものゝ、人間能率の技術的物理的增進に終始し、その心的增進に關係せる所は實に僅小である」。從つて此の點に關して科學的管理法は未だ吾人をして信賴せしむるに充分でなく、數多の問題を應用心理學のために殘した。本書は正に其の一つの重要なる研究事項たる適材配置法に關する應用心理學の一部門としての系統的研究である。而して此の方面の研究に關しては近來幾多の內外心理學者が、各特殊の方面に於て斷片的に研究を行ひつゝあり、又今日吾々が此の方面に於ける體系的著作を見出すこと必ずしも不可能ではない。乍然　此等の單行著作は職業心理學の全範圍に渡つて、適材適所の要求に出發する完全なる組織系統を與ふるに不完全であるか、或は未だ一部分の完成に過ぎない。されば著者が、職業心理學の擡頭は「日尚は淺く、……未だ學問としての組織的體系を備ふる迄には至らず、且つ將來開拓を待つ幾多の未墾の原理が殘されてゐるのである。余が玆に敢へて之が系統組織を試みるもの、畢竟この欠を補はんが爲の微意に外ならぬのである。」と云ふ。吾々は著者の此の努力に對して多大の敬意を表すると共に、從來科學的研究の範圍に於ては多く諸外國の著作に一歩を讓らねばならなかつた吾國に於て、本書の如きは正に其の一例外と目することを得べく、職業心理學の今後の發達に對して重要なる地位を占むるであらう。

本書は第一篇序論、第二篇基礎篇（職業分析と性能研究）、及び第三篇實用篇（職業的選拔と職業指導）の三篇より成る。

職業心理學の體系から云へば、適材配置法の研究が可能とせらるゝがためには、先づ其の研究を支持すべき礎臺として二つの基礎的研究が必要である。一は職業分析であり他は性能研究である。是等二の基礎的研究は、適材適所の二面即ち職業と人とに關する充分にして確實なる知識と、簡明にして信賴すべき鑑別法とを供するものである。其は職業心理學の理論的基礎であり且つ出發點である。本書第二篇は此の基本的研究に當てられてゐる。

職業心理學の範圍に於ては職業活動そのものゝ心理學的研究が重要であり、職業の形式的・技術的・經濟的方面よりする外面的研究即ち「業態調査」よりは、職業の心的內容を人の性能に關係せしめて分析する「性能調査」が遙かに必要である。而して著者が、職業の分析並に其の分類に於て是認する根本的立場は凡そ次ぎの如くである。即ち各種職業の要求する一般素質、殊に所謂「知能」を標準として當該職業作業を營むに必要なる、若しくは最好適の知能の範圍に就いて各其の最高最低の兩限界を決定すること、更に各種職業を營むに欠くべからざる箇々の特殊能力の發見と。其の數量的測定に依る必要なる各特殊能力の相對的重要度の決定が必要である。蓋し單に知能に依る職業の分

析に於ては吾々は漸く五六種の職業群を區別し得るに過ぎず、甚だしく分化せる今日の多數の職業に對しては單に此れのみを以てしては未だ充分なる差違を明にするを得ないが故に、同一知能水準にある各種職業の必要とする諸特殊能力の質及び量に於ける差異を確定することが必要となる。

職業分析の結果職業上の適材又は不適材の如何なるものなるかゞ明瞭にされ得たとしても、之に從事すべき各人の性格能力其のものゝ檢定の方法が不完全であれば適材を檢出し之を適所に配置することは不可能である。故に職業心理學に於ては各人の性能檢査に關する理論的研究が必要となる。乍然、性能研究其れ自體は本來職業心理學に屬するものではなく、差異心理學或は個性心理學の一部を形成すべきものであつて、前者は後者の理論的研究を援用するを以て足る。而して著者は別に「性能研究」なる別箇の著作を企圖せらるゝが故に、本書に於ては單に從來の性能研究法を一瞥し、其の職業心理學的意義を考察するに止まる。

第三篇に於ては既に第二篇に於て論究せられたる職業心理學の基礎的研究の結果に基いて、其の實用的方面が取扱なれてゐる。本篇は分れて三章を成す。著者が第一に問題とする所は性能檢査から區別せらるべき適性檢査である。蓋し性能檢査は唯だ其れのみを以てしては未だ何等實用上の價値を有するものではない。即ち性能檢査に於ては適材不適材の區別は不可能である。職業分析の結果吾々の知り得たる各特殊職業の必要性能に對して各人の職業的適否を確定することが必要である。茲に適性檢査が存し、而して著者は從來行はれたる適性檢査中相關檢査が未だ理論的には充分の滿足を供し得ないものではあるが先づ採るべき方法なりとする。更に適材配置の實用的方面は二つの立場に於て可能である。即ち一は適材の選拔、二は職業指導之である。著者は適材選拔に於て各種の事務的職業、專門技術的職業及び商業に關しては特に一般知能檢査の適性檢査としての意義を重要視する。而して職業指導の場合に於ける適職の選定に當つては、著者は英米流の「一般知能主義」と獨乙流の特殊知能主義の孰れにも偏せず、兩者を併用する「二重鑑別主義」を以て可とす。尙ほ職業指導は其の性質上主として青少年のために適職を選定するを以て主眼とするが故に、彼等の知能、興味の方向を精査するの必要なるは素より、著者は職業に關する忠言、訓練、敎育の重要を說き。又職業授與若しくは紹介の後尙ほ彼等青少年に對する保護を力說する。而して著者が職業指導と關聯して今日吾國の公立職業紹介所の事業に關して述ぶる所の見解は又確かに吾々の一考に價する所であらう。

著者と共に吾々は職業心理學のために一つの注意すべき事實を認めねばならぬ。凡そ適材適所の理想に對する從來の努力は時に傳說的であり、又主觀的の推斷に基き、或は又非科學的の判斷に滿足した。職業心理學は、反之、常に客觀的且つ理論的確證の上に適材の配置を事實に可能ならしめんとする研究である。然かも職業心理學は今日迄の所必ずしも總てに於て完全なる科學的研究の結果に達し得たのではない。蓋し複雜にして動的なる人間の精神を取扱ふ場合には直ちに此の事は望み得ないからである。されば吾々は職業心理學上の研究の結果が實際に應用せらるゝ場合には蓋然性に於て適材の配置が可能なることを認めねばならぬ。而して此の事は職業心理學の實際的應用の無効果を露曝するものではない。職業心理學には未だ多くの問題が殘されてゐる。特に職業分析の系統の如きは複雜多樣にして一朝にして完成し得られず、故に宛かも世界の心理學者は此の方面に於ては一つの共同事業の完成に努力しつゝあると見做さるべきである。

本書は菊版七〇〇頁の大冊であり、著者は特に其の職業分析並に適材選拔の二章に於て從來各國の研究者に依りて行はれたる特種研究を多數掲げ、同時に著者自らの立場に於て一々是等の研究を批評、評價し、今後の發展に對して意義ある研究の方途を示されしは甚だ多とすべきである。尙ほ章或は節毎に引用著書並に論文を記載せられたるは特に後學者の爲めに甚だ有意義である。乍然、

若し著者にして卷末に索引を附するの勞を惜まれざりしならんには、何人も遙かに大なる便益を感じたであらう。

最後に本書は著者の計畫になる「應用心理學研究」の第三卷として刊行せられしものであつて、尙ほ「性能研究」、「作業心理學」及び「軍事心理學」の三卷は軈て公刊せらるべく、又「應用心理學概論」「經濟心理學」、「廣告心理學」及び「教育心理學」の四卷の計畫あり、吾々は此の機に際して著者の此の宏大なる計畫の完成の一日も早からん事を希望して止まない。（昭和二年十月發行、教育研究會、定價金五圓五十錢）

（昭和三年二月十二日）

上野陽一著　産業能率概論

藤林敬三

本書は一昨年夏、著者が滿鐵能率講座に於て爲したる講義から成り、既に『産業能率講義要領』と題して、當時一部の人々の間に配布せられたるものを最近再び一般讀者のために公刊せられたるものである。

本書は總論、史論、標準論、組織論及び結論の五部から成る。著者は總論に於て産業能率の意義を、史論に於て能率研究の發展を叙述す。而して本書の骨子をなすは標準論と組織論とである。著者の見解に從へば、産業能率とは「産業ノタメニ費ストコロト、ソノ結果トヲ比ベテ、ナルベクソノ比ヲ大ナラシメルコト」、或は「最少限度ノ資本・物質・知識・勞働ヲ費ヤシ、生産ニヨツテナルベク大ナル富ヲ作ルコトデアル」。（四、五頁）而して産業能率の直接目的とする所は製品の「品質ノ向上、出來高ノ增進、製作期間ノ短縮」であり、（一一〇頁）其の結果は生産費の減少である。（一二七頁）産業能率の斯くの如き目的と結果とのために、先づ生産上の人的要素並に物的要素に關する種々の方面が標準化せらるゝことが必要であり、而して是等の標準化と其の維持とが實現せらるゝならば、茲に製品の品質、出來高及び製作期間の標準の確定が可能となり、更に製造原費（原價）の豫定標準が確定せられ得る。故に著者の見解に於ては結局産業能率の增進は製造原費をして其の豫定標準以下に低下せしめんとする努力の內に實現せらる。凡そ最近の發達にかゝる科學的管理法に發する能率論は、結局本著者に於て見るが如く、私經濟的考慮に歸着する。乍然、能率論を以て心理學、生理學を基礎とする生産の人的要素に關する一應用科學中に解決せらるべきものなりと做す評者は、直ちに著者の能率概念に讃同し得ない。（本誌第二十一卷第十號掲載拙稿參考）

其は兎もあれ、既に打ち樹てられたる標準は一定の方法、手續、設備の下に維持せられることが必要である。かくて著者の標準論は標準化論と標準維持論とに分たるゝが、本書に於ては主として前者に重きを置き標準化に必要なる研究の方法及び結果の叙述が本書の大部分を占めてゐる。更に組織論に至つて著者は右の標準化を事實に可能ならしめるために、適當なる工場組織の必要を說き、分任組織として Taylor の functional foremanship を是認する。

著者は本書に題して「産業能率概論」と云ふも、吾國に於ては科學的管理と云ふよりは「能率」なる語が一般に行はると著者自ら記するが如く、（七頁）本書は正に科學的管理法概論である。科學的管理法に關しては最近吾國に於ても國松豐氏の「科學的管理法綱要」（大正十五年）がある。此の書が Taylor の科學的研究の要目と見做さるゝものを傳へる（第二編）に對して、本書は標準論を中心に系統付けられてゐる點に特色がある。乍然、國松氏が科學的管理法に對する從來の非難に對して其の救濟に就いての用意を持たるゝに對して、本著者は遙かに熱心に Taylorism 本來の精神を傳へてゐる。（結論）唯だ、米國に於ける科學的管理法が科學から溫情への傾向を辿れるに反して、著者は吾